Kodak Gray Scale
© Kodak, 2007 TM: Kodak
A 1 2 3 4 5 6 M 8 9 10 11 12 13 14 15 B 17 18 19
Kodak Color Control Patches
© Kodak, 2007 TM: Kodak
Blue Cyan Green Yellow Red Magenta White 3/Color Black

910.28
M214Km
00257088

考査事務参考資料第十九号
昭和二十六年九月十四日
（九一〇・二八一M二二四MK）

正岡子規研究文献目録稿

国立国会図書館
一般考査部

一般貸出

国立国会図書館
27.1.28
257089

頁	行	誤	正
凡例	三	記載×	記載×
二	九	子規生生逝く×	子規生逝く×
五	九	矢田掃雲×	矢田掃雲×
六	六	一〇以降連載×	一〇以降連載×
一三	八	載×	載×
一四	九	子規居子×	子規居子×
一五	九	宋流×	宋流×
一五	一〇	田田亜流×	田田亜流×
一六	六	巻川風骨解説×	巻川風骨解説×
一六	八	仰臥漫録×	仰臥漫録×
一八	一		
一八	二	六月二十八の條×	六月二十八の條×
二五	二	子規の言説×	子規の言説×
二五	一三	鬼ぶ出すぎ×	鬼ぶ出すぎ×
三一	一二	「日本文学講座」第×	「日本文学講座」第×
三四	五	子規の居績×	子規の居績×

P1028M214Km

257083
国立国会図書館
27.1.28

正岡子規研究文献目録 稿 正誤表

頁	行	誤	正
凡例	三	記載×	記載。
二		九子規生逝く×	子規先生逝く。
五		九矢田掃雲×	矢田掃雲。
六		六一〇以降連載×	一〇月以降連載。
一三		八載×	載。
一四		九子規居子×	子規居士。
一五		九未流×	未流。
一五		一〇白田亜流×	白田亜浪。
一六		七春川鼠骨解説×	春川鼠骨解説。
一六		八仰臥漫録×	仰臥漫録。
一八		一	前田剛二彫刻
一八		二六月二十八の條×	「宮田三郎編」又は六月二十八日の條。
二五		二子規居士雅談×	子規居士雅談。
二五		一三鬼ヶ出すまゝ×	鬼ヶ出すまゝ。
三二		一二「日本文学講座」第×巻	「日本文学講座」第八巻
三四		五子規の居績×	子規の居績。
三六		一二永井一考×	永井一孝。
三八		五乙子の俳論×	乙字の俳論
四〇		一三子規居子×	子規居士。
四一		七宮田戊子×	宮田戊子
四二		一二論廓×	輪廓。
四五		四子規居子×	子規居士。
四七		九宮庄鶴出×	写生の提唱。
四八		九宮田戊子×	宮田戊子
四九		一一日不派×	日本派。
五一		三保田与八重郎×	保田与重郎
五一		五近代日本文学論大×	近代日本文学評論史。
五一		六宮田戊子×	宮田戊子。
五二		一岩手の志子×	岩手の孝子。
五四		九懸葵×	懸葵。
七三		五上平平谷×	上甲平谷

Pr°28M214Km

凡例

一、本稿は、正岡子規の人及び著作物に関する研究文献または参考文献を集めたものである。

一、本稿では、研究文献目録としての性質上、正岡子規自身によって執筆された稿本・遺墨、及び子規自身によって刊行せられた文献類は、すべてこれを割愛した。たゞし、子規自身の著作物ではあっても、子規の歿後、後人によって編さん刊行されたものは、研究史的意義を考慮して、できうるかぎり収めることにした。

一、採録の文献は、主として子規の歿した明治三十五年九月以降昭和二十六年八月までに発表された單行本、逐次刊行物所載の論文及び記事である。たゞし、子規生前の文献ではあっても、子規以外の第三者が、子規に関する学術的または人間的興味から記したものは、研究文献として収録した。

一、文献収載の順位は、研究史への使をはかって、発表の年月順とした。

一、研究文献中、比較的重要と思われるものについては、※印を附した。一つには入門者への便を考慮し、他は当館の資料収集の手がかりたらしめたためである。

257088

P1028M214Km

凡例

一、本稿は、正岡子規の人及び著作物に関する研究文献または参考文献を集めたものである。

一、本稿では、研究文献目録としての性質上、正岡子規自身によって執筆された稿本・遺墨、及び子規自身によって刊行せられた文献類は、すべてこれを割愛した。たゞし、子規自身の著作物ではあっても、子規の歿後、後人によって編さん刊行されたものは、研究史的意義を考慮してできうるかぎり収めることにした。

一、採録の文献は、主として子規の歿した明治三十五年九月以降昭和二十六年八月までに発表された単行本、逐次刊行物所載の論文及び記事である。たゞし、子規生前の文献ではあっても、子規以外の第三者が、子規に関する学術的または人間的興味から記したものは、研究文献として収録した。

一、文献収載の順位は、研究史への便をはかって、発表の年月順とした。

一、研究文献中、比較的重要と思われるものについては、※印を附した。一つには入門者への便を考慮し、他は当館の資料収集の手がかりたらしめたためである。

257088

一、本稿の作成にあたっては、

小泉　苳三著　　根岸短歌会とその位相
藤川　忠治著　　正岡子規
岡野他家夫著　　明治文学研究文献総覧
浪速高等学校編　　国語国文学雑誌論文目録
久松　潜一編　　国語国文学年鑑　三冊
文学編輯部編　　雑誌分類要目（文学所收）
大久保正他著　　日本文学史入門　下巻
国立国会図書館　　収書通報
同　　雑誌記事索引（人文科学篇）
同　　全国出版物総目録（昭和二十三年度）

等に負うところがすこぶる大であった。

一、この種の目録が、寓目しえたもののみにかぎるべきであることはいうまでもないが、現物にあたりえなかったものが多く、前掲の諸索引から再録したものも少くない。たゞし相互参照して正確を期すことは心懸けた。記載事項のうち、不明なものは省略することにした。誤りや記載漏れについては大方の御教示をえて訂正したい。

一、記載事項は、

（記載事項）

正岡子規研究文献目録稿

明治三十二年（一八九九年）

（論著名）　（誌名・発行所等）　（月）

文士政客風聞　大学館　四六仮一二〇頁　(12)

明治三十四年（一九〇一年）

伊藤左千夫　子規子の近状　『新聲』　(11).(6)

不可得　正岡子規　『新佛教』

明治三十五年（一九〇二年）

新聲社編　現代百人豪　新声社　菊・約二二〇頁　(4)

久良伎　子規正岡先生を哭す　『明星』(10)
　　竹の里人正岡先生逝く　『心の花』(10)
伊藤左千夫　賛正岡先生歌　『心の花』(10)
河井酔茗　故正岡子規子　『文庫』(10)
諸家　子規追悼号　『木兎』(10)
佐藤紅緑　子規翁と芭蕉翁
矢田挿雲　嗚呼子規先生
紅緑　子規翁終焉記
水巴　子規生生逝く
岡野知十　思ひよる日　『半面』(10)
小谷保太郎編　子規隨筆　正續　吉川弘文館　菊仮　(10)
　　―日本叢書の内―
（註）正続二冊から成り、一〇月から一二月にかけて刊行された。「星汁一滴」「病牀六尺」の二隨筆と「春色秋光」の一文が收めてある。

伊藤左千夫　師を失ひたる吾々　『心の花』(11)
義郎　追憶記　『心の花』(11)
※小谷保太郎編　子規言行錄　吉川弘文館　菊仮　三三八頁　(11)
　　―日本叢書の内―
（註）編者のほか、碧梧桐、虚子、古島一念等が執筆している。
白石南竹編　俳人子規　六合社
　　明治三十六年（一九〇三年）
諸家　子規追悼号　『ホトトギス』(3)
内藤鳴雪　追悼雅記
五百木飄亭　子規の書簡
坂本四方太　思ひ出づるまゝ
同　写生文のこと

香取秀眞　短歌会の起り
河東碧梧桐　墓側
佐藤紅緑　子規翁
寒川鼠骨　故人の回想
高浜虚子　子規の手簡
子規年表
村上霽月　子規君に関する記録
渡辺香墨　六年有余
原抱琴　子規先生
鈴木芒生　子規先生南岳草花畫巻を得給ひし事
吉田月秋　子規先生を追想す
山口花笠　子規先生追懐記
関標雨　子規先生に関する記事
奈倉梧月　子規先生訪問につきての記

仙波花叟　子規先生十三歳の時の書簡
三田淡紅　遺髪埋葬式の記
加藤鹿嶺　懶祭書屋主人
宮崎梅塘　子規先生を訪ふ
松田半粋　書簡二通
東京追悼会・地方追悼会
伊藤左千夫　竹の里人　『馬酔木』
長塚節　竹の里人　『馬酔木』
矢田掃雲　子規忌一周忌の文　『ハマユミ』

明治三十七年（一九〇四年）

伊藤左千夫等編　竹の里歌　俳書堂　(11)

（註）のち、大正四年「子規遺稿」に合冊出版さる。

明治三十八年（一九〇五年）

長塚節　写生の歌に就て　『馬酔木』（1）

高浜虚子　正岡子規と秋山参謀　『ホトトギス』（7）

蕁房　竹の里先生四周忌　『馬酔木』（10）

諸家　嬉祭書屋俳句帖抄講義　『ハハキ木』（10）

（註）一〇以降連載。

子規小品文集

（註）のち、大正四年「子規遺稿」に合冊出版。

明治三十九年（一九〇六年）

伊藤左千夫　絶対的人格　『馬酔木』（1）

高浜虚子　正岡子規　『文章世界』（4）

正岡子規自筆稿本俳人芭蕉　文洲堂　美濃紙綴（6）

寒川鼠骨　明治四大家俳句集　二冊　大学館　四六半截（7）

（註）七月から九月まで刊行。

子規小説集（9）

（註）のち、大正十四年の「子規遺稿」に合冊出版。

明治四十年（一九〇七年）

子規書簡集　上下（4）

（註）のち、大正四年の「子規遺稿」に合冊出版。本書は四月と六月に刊行されている。

中村樂夫　明治の俳風　俳書堂　菊版　一冊（9）

（註）本書は、子規・鳴雪・小波・紅葉等明治の主要俳人二十家に対する評論をまとめたもの。

語　家　正岡子規論　『中央公論』　(9)

—「明治故人物評論」の五—

佐藤紅緑　子規先生

佐佐醒雪　子規論

内藤鳴雪　正岡子規の人物

巌谷小波　明治文壇四天王の一人

坂本四方太　子規と写生文

伊藤左千夫　子規と和歌

岡野知十　子規子に就き

柳川春葉　故子規子に就いて

戸川残花　子規に対する雅感

角田竹冷　子規子

伊藤松宇　正岡子規君

沼波瓊音　子規書簡集を読む

大谷繞石　正岡さん

明治四十一年（一九〇八年）

子規書簡

増田琵次郎　子規系統の文学を論ず　『ホトトギス』(1)

三井甲之　空想文学を排して日本派の将来を論ず　『アカネ』(3)

諸家　近代三十六豪　『アカネ』(3)

（註）樗牛・一葉・透谷・子規・紅葉等の評論　『文章世界』(5)

諸家　子規居士七周忌記念号　『ホトトギス』(9)

夏目漱石　正岡子規へのち漱石全集所収）

中村不折　子規追想

文泉子　子規と新文芸

寒川鼠骨　先生の笑顔

伊藤左千夫　子規居士の居常

瀬川疎山編　子規句集　文山堂　四六判　(10)

古泉千樫　子規七周忌歌会　『阿羅々木』　(10)

内藤鳴雪　子規の生涯　『文章世界』　(12)

明治四十二年（一九〇九年）

河東碧梧桐編　子規遺稿　子規句集　俳書堂　(6)

高浜虚子

（註）のち、大正四年の「子規遺稿」に合冊出版。

内藤鳴雪　河東碧梧桐　等　子規句集講義　『アララレ』　(11)

（註）一〇月以降連載。

中野三允　子規句集講義雑感　『アララレ』　(11)

明治四十三年（一九一〇年）

服部嘉香　常識的革命者　正岡子規　『早稲田文学』　(1)

―子規の人物事業及文壇との関係―

明治四十四年（一九一一年）

柳原極堂　正岡子規と秋山大佐　『フレンド』　(2)

伊藤左千夫　正岡子規先生　『アララギ』　(9)

柿乃村人　十週年雑感　『アララギ』　(9)

香取秀眞　十とせの月日　『アララギ』　(10)

齊藤茂吉　子規忌歌会の記　『アララギ』　(10)

高浜虚子　子規居士と余　『ホトトギス』　(12)

（註）のち、昭和八年甲鳥書林発行の「正岡子規」に収録されている。

明治四十五年（一九一二年）
―大正元年―

森　無黄　椎の友と雑誌「俳諧」　『ひばり』　(6)

斉藤茂吉　短歌運作論の由来　『アララギ』

寒川鼠骨　正岡子規
―明治文壇の概観―　『文章世界』金鳳号　(10)

寒川鼠骨　正岡子規
―明治文壇における幾多の光景―　『文章世界』七―一四

大正二年（一九一三年）

中村不折　清廉高潔の生　『ホトトギス』　(8)

長塚節　知己の第一人者　『ホトトギス』　(8)

正岡毋堂　熱心なお方　『ホトトギス』　(8)

大正三年（一九一四年）

高浜虚子　子規居士追憶談　『ホトトギス』　(10)

（註）一〇月以降数回連載。

大正四年（一九一五年）

高浜虚子　柿二つ　『東京朝日』　(1)

（註）昭和八年甲鳥書林刊「正岡子規」に再録、さらに、昭和二十三年文芸春秋選書に単行された。虚飾のない小説である。元旦から二〇回にわたって連載。

高浜虚子　子規居士と余　日月社　(6)

吉野左衛門　子規居士の葉書について　『ホトトギス』　(9)

吉野左衛門　子規居士の追憶其他　『ホトトギス』　(10)
矢田掃雲　初対面の子規先生　『ホトトギス』　(11)
寒川鼠骨編　子規句集　寒山落木より
高浜虚子編　子規遺稿

大正五年（一九一六年）

大町桂月　十人十色　名物男　実業之日本社　四六判　三四八頁　(3)
花田比露志　五月と子規先生の歌　『しほざゐ』　(5)
内藤鳴雪　高浜虚子　共著　子規句集講義　俳書堂　(8)
木下春雄　子規居子の月並論　『ホトトギス』　(9)
子規忘歌会記事　『アララギ』　(10)
子規選集　花枕
―代表的名作選集第二編―

大正六年（一九一七年）

平賀泣崖　竹の里歌鈔　『アララギ』　(1)
（註）大正七年一月まで数回にわたって連載。
諸家　子規追悼号　『俳諧雑誌』　(9)
默語　子規より默語へ
五土　絲瓜佛追憶
月汀　根岸庵の一夜
古渓口述　子規といふ人
三井甲之　子規及左千夫の未流　『短歌雑誌』　(10)
※臼田亜流　正岡子規　俳句世界社　菊半截　一〇九頁　(11)
―現代俳句評伏義書の内―
木下春雄　俳人子規　実業之日本社　菊半截　(11)

大正七年（一九一八年）

赤木格堂　子規夜話　『洗柿』　(2)

（註）大正九年二月まで三回連載。

岩谷嵐子　子規の遺迹を守る人々の擬勢　『雄辨』　(2)

※西宮藤朝　人及び芸術家としての正岡子規　新潮社　菊半截　二〇三頁　(6)

―日本文豪評伝叢書の内―

○寒川鼠骨解説　仰臥漫録　原寸複製　岩波書店　四六倍　和紙綴　(9)

岡麓　子規歌会記事　『アララギ』　(11)

俳句研究会編　仰臥漫録について　『アララギ』　(12)

子規名句集

大正九年（一九二〇年）

斎藤茂吉　短歌に於ける写生の説　『アララギ』　(1)

諸家　糸瓜忌特輯号　『俳諧雑誌』　(10)

大谷繞石　写真を眺めて

愚哉　根岸庵の追憶

鳥堂　輪講の夜

大正十年（一九二一年）

斎藤茂吉選　正岡子規選集　アルス　(10)

大谷是空　写生文の宗祖正岡子規　『中央文学』　(7)

折井愚哉　子規居士追憶断片録　『俳句と批評』　(10)

子規遺墨　複製　山郎社　菊　(12)

（註）「墨汁一滴」の六月二十八の條を複製したもの

大正十一年（一九二二年）

古泉千樫編　正岡子規歌論集　竹里歌話　アルス　四六判　四〇〇頁　(1)

北條素園選　子規句集　―子規一代集―　『短歌雜誌』　(7)

橋田東聲　偉大なる凡人子規

香取秀眞　正岡先生のことども　『あけび』　(9)

大谷句佛　子規に就ての感想　『懸葵』　(10)

池田秋旻　增補　日本俳諧史　星文館　四六判　六三四頁　(11)

（註）第五篇「明治の俳壇」中に「正岡子規」の論述あり。

大正十二年（一九二三年）

斎藤茂吉　正岡子規　竹乃里歌全集　『アララギ』　(11)

古泉千樫編

岡麓　香取氏の正岡先生のことども を読んで

大正十三年（一九二四年）

高須芳次郎　日本現代文学十二講　新潮社　四六洋　五二五頁　(1)

（註）第八講「詩歌戯曲を中心としての革新運動」中に「短歌革新の運動」・「俳句革新の運動」について述べられている。

岩城準太郎　表現と鑑賞　東洋図書株式会社　四六洋　二八四頁　(2)

（註）本書(五)に「正岡子規の文体革命運動」「写生文の主張と習作」がみられる。

小島憲弥　文壇百話　二松堂　四六洋　三四九頁　(3)

（註）「正岡子規と日本派俳句」の論がみられる。

三並　良　子規の事ども　『日本及日本人』(5)
橋田東声　新釈正岡子規歌集　紅玉堂(6)
島田青峰　正岡子規のこと　『早稲田文学』(6)
河東碧梧桐　子規の回想　『碧』(6)
臼田亜浪　子規の観た芭蕉の心　『石楠花』(8)
高浜虚子　写生といふこと　『ホトトギス』(10)
（註）大正一四年一〇月まで連載。
野田別天楼　子規の芭蕉観　『にひはり』(11)
※アルス発行　子規全集　一五巻　アルス　菊洋
（註）大正一三年から大正一四年まで予約出版。のち、普及版が出た。

大正十四年（一九二五年）

島田青峰　初期の正岡子規　『早稲田文学』(6)

小島憲弥　明治大正新文学史観　教文社　四六洋　六七四頁(6)
（註）第四章(三)に「正岡子規と俳句革新運動」がある。
岩城準太郎　明治大正の国文学　成象堂　四六洋　二九五頁(6)
（註）第四章「詩歌革新の運動」あり。
河東碧梧桐　子規の第一歩　俳書堂(12)
岡麓　正岡子規と長塚節君　『アララギ』(12)
島田青峰　子規及其周囲　『新小説』(12)

大正十五年（一九二六年）

岡麓　正岡子規　『アララギ』(1)
三井甲之　正岡子規論　『日本及日本人』(1)
斎藤茂吉　明治大正革新運動の序幕に至るまでの考察　『中央公論』(1)
島田青峰　晩年の正岡子規　『早稲田文学』(4)

青木月斗　子規鳴雪観　『同人』(4)

高須芳次郎　近代文芸史論　日本評論社　四六洋　五〇八頁　(5)

（註）第九章「竹の里人の一派」・「正岡子規の俳句革新運動」・「子規及び其の周囲の人々」あり。

小酒井不木　正岡子規の二恋　『短歌』(5)

日比修平　歌壇に誤られたる子規の写生観　『青樹』(6)

斎藤茂吉　正岡子規　『国民新聞』一九八明(9)

故島木赤彦　子規の歌に就て　『アララギ』(10)

福井久蔵　大日本歌学史　不二書房　四六洋　五〇〇頁　(11)

（註）「竹の里人と根岸短歌会」の記述あり。

高浜虚子　子規のこと　『改造』(12)

昭和二年（一九二七年）

小池直次郎　子規居士と連俳　『信濃教育』(1)

藤川忠治　子規の性格及び思想の断面　『国語と国文学』(2)

橋田東聲　子規歌話雑抄　『短歌雑誌』(2)

藤川忠治　子規の歌人評論　『国語と国文学』(6)

江見水蔭　自己中心　明治文壇史　博文館　四六洋　四八八頁　(10)

（註）本書第七に「子規を励ます」の叙述がある。

岩城準太郎　明治文学史　修文館書店　四二〇頁　(10)

（註）第五章「俳句の革新」・「和歌の革新」あり。

※橋田東聲　正岡子規全伝　春陽堂　四六判　八〇〇頁　(12)

昭和三年（一九二八年）

大日本雄弁講談社　近世名人達人大文豪　『現代』附録　五二〇頁　(1)

（註）本書に、河東碧梧桐の筆になる「正岡子規」が収められている。

故古泉千樫　正岡子規に就いて　『青垣』　(3)

（註）四月まで連載。

藤川忠治　子規と節の関係　『とねりこ』　(3)

（註）三月以降連載。

改造社編　正岡子規集　改造社　菊洋　五巻四頁　(5)

―現代日本文学全集第十一巻―

寒川鼠骨　年譜（正岡子規集所収）

―現代日本文学全集第十一巻―

市橋　繹　子規居士恋愛異聞　『ひむろ』　(5)

河東碧梧桐　正岡子規研究　新潮社　(5)

―日本文学講座―

アルス刊　分類俳句全集　全一二巻　アルス　四六洋　各五〇〇頁

※島田青峰　当生支の研究　新潮社　菊倍　(5)

―日本文学講座巻十七―

斎藤茂吉　正岡子規　『改造』　(6)

寒川鼠骨　子規居子雅談　『改造』　(6)

太田鴻村　晩年の子規の句の一考察　『石楠』　(8)

子規歌集

―岩波文庫三六六―

坂元雪鳥　子規随筆　(9)

※諸家　正岡子規特輯号　『日本及日本人』

赤木格堂　先師の晩年

佐藤紅緑　師影六尺

高浜虚子　子規居士の古い時代の句を読む

大谷繞石　十句集のことども

石井露月　烟を聴きつつ

安江不空　思ひ出すきゝ

寒川鼠骨　覚書子規

青木月斗　子規居士二十七回忌
河東碧梧桐　のぼさんと食物
三並良　子規の少年時代
柳原正之　子規の青年時代
菊地仙湖　豫備門時代の子規
藤野準　子規に関すること
五百木飄亭　追憶断片
古島一雄　日本新聞時代の子規
中村不折　子規君のこと
末木格堂　追懐餘録
香取秀眞　正岡先生の塑像
下村為山　子規の絵
山田三子　末発表の手紙其他
吉村冬彦　子規の追憶

蔵　櫨堂　子規先生と森林
中村楽夫　三十三年前の事
宮本仲　子規と病気
永田青嵐　子規の印象
坂東宣雄　憶ひ出
佐々木信綱　おもひ出の二三
陸　てつ子　正岡さん
岸　俊　幼時の思ひ出
柴田宵曲　あづま菊の歌
蔵　櫨堂　子規庵と其主蔵
島田青峰　子規の研究出でよ
太田水穂　子規の和歌革新の眞相
三井甲之　正岡子規の和歌革新
橋田東聲　子規の歌学思想

寒川鼠骨　子規庵蔵　子規居士未発表遺稿
―小説「龍門」その他―
子規居士遺珠解題、

石井相蔭　正岡子規に就いて　『京鹿子』

橘　文七　明治大正文学史　啓文社書店　四六洋　三三六頁　(11)　(12)

（註）本書第二期の三に「根岸派の人々と正岡子規」・「子規の新俳句」がみられる。

子規俳話
―改造文庫第二部第三八篇―

春陽堂刊　正岡子規篇
―明治大正文学全集第二十巻―

昭和四年（一九二九）

※橋田東聲　子規と節と左千夫

※河東碧梧桐等編　子規全集　二十二巻　春陽堂　四六判　四〇〇頁　(3)

第一巻　俳句全集　壹　寒山落木　巻一、二、三　改造社　四六判洋　各五〇〇頁　(6)

第二巻　俳句全集　貳　寒山落木　巻四

第三巻　俳句全集　参　寒山落木　巻五

俳句稿　巻一、二

第四巻　俳論・俳話　壹（向井去来其の他）

第五巻　俳論・俳話　貳（試問其の他）

第六巻　歌論及歌話（竹の里人日く其の他）

第七巻　和歌・新体詩　竹の里歌

新体詩（鹿笛其の他）

第八巻　隨筆・松籟玉液其の他

第九巻　隨筆　旧都の秋其の他

第十巻　小説　月の都其の他

第十一巻　少年時代創作篇　壹
　　筆まかせ其の他
第十二巻　少年時代創作篇　貳
　　自笑文章其の他
第十三巻　編著　壹　俳家全集一
第十四巻　編著　貳　俳家全集二
第十五巻　書　簡
第十六巻　書　簡
第十七巻　評論・漢詩・日記
第十八巻　補遺・年譜・蔵書目録
第十九巻　編著補巻　壹（墨田の由縁その他）
第二十巻　編著補巻　貳（八千八聲その他）
第二十一巻　編著補巻　参（富士のよせがきその他）
第二十二巻　編著補巻　四（和歌手抄等）

257080

（註）本全集は昭和四年六月から、同六年一一月の間に刊行された。

語　家　子規全集附録月報　（6）
高浜虚子　子規居士と余　日月社　（6）
伊藤静雄　子規の俳句　『国語と国文学』　（7）
　　―附　子規居士が虚子に宛てたる書翰　―
（註）翌月まで二回連載。
尾山篤二郎　明治歌壇概史　紅玉堂　菊半截一〇九頁　（8）
（註）「子規、鉄幹の従軍」・「信綱及子規の歌」を収めている。
鈴木敢也　概観日本文学思潮　中文館　菊洋五五〇頁　（9）
（註）本書第七篇第二章に「歌壇の革新」・「俳句の更新」がみられる。
橋田東聲　正岡子規の萬葉観並にその運動　『国学院雑誌』　（10）

昭和五年（一九三〇年）

土屋文明　子規と春園　『アララギ』(1)
松村一雄　子規の写生主義　『言語と文学』(2)

（註）四月と二回にわたって連載。

湯本喜作　子規と愚庵　『水甕』(3)
太田鴻村　碧梧桐のみたる前期子規の俳風　『石楠』(3)
改造社刊　正岡子規集・長塚節集　四六判(6)

―現代短歌全集第四巻―

寒川鼠骨　正岡子規集のために　『現代短歌全集』(6)
寒川鼠骨　正岡子規年譜　『現代短歌全集』(6)
戎野冬嶺　子規居士の最後　『同人』(9)
福田東聲　子規を憶ふ　『霸王樹』(10)
岡麓　子規先生のこと　『短歌雑誌』(11)
尾山寛次郎　歌人子規　『青海原』(11)
小島吉雄　竹譜鉄幹子規不可並称問題　『能古』

昭和六年（一九三一年）

上田英次　根岸短歌会　『水甕』(1)
島山樵名　正岡子規を素描する　『水甕』(1)
石樽千亦　子規が歌を始めた頃　『霸王樹』(1)
中川一政　子規の絵と歌　『短歌新聞』(1)
※河東碧梧桐等編　子規居士年譜　改造社(2)

―「子規全集」第十八巻所収―

児山信一　新講和歌史　大明堂　菊洋六三八頁(3)

（註）第一章に「正岡子規」を論述している。

高田浪吉　正岡子規に学ぶ　『アララギ』(4)
高浜虚子　明治の俳句　新潮社(5)

―「日本文学講座」第　巻所収―

加藤順三　子規の自然觀　『月刊日本文学』(6)

※斎藤茂吉　正岡子規　『岩波講座』(8)

—「作品及作家・明治時代」（日本文学）所收—

※諸家　子規居士三十週年記念号　『同人』(9)

古賀藏人　子規の居積

—松山、神戸と須磨—

柳原極堂　松山同頼

—子規について—

菅裸馬　子規居士の俳句

亀田小蛄　椎の木の会まで

—子規について—

茂野冬雪編　著作一覧

—子規—

古賀藏人編　子規居士研究年誌

斎藤茂吉　喩喩の読方其他　『文学』(9)

—子規—

亀田小蛄　奥羽旅行より小日本　『同人』(10)

—子規—

茂野冬雪　子規の研究　『同人』(10)

本田一杉　子規居士の雅号に就いて　『ホトトギス』(10)

大澤弘　子規忌小感　『あけび』(10)

古賀藏人　子規の居積追ひ書　『同人』(11)

改造社編　正岡子規全集　五冊　改造社　四六倍　各約六〇〇頁　(11)

—「日本文学大全集」の内—

（註）昭和六年一一月から同九年二月までのあいだに刊行。

中村憲吉　正岡子規　改造社　(12)

—「短歌講座」第七巻所收—

寒川鼠骨編　子規歌論歌話

—改造文庫第二部第三十七編—

昭和七年（一九三二年）

太田鴻村　子規の新年の句について　『石楠』　(1)
依田秋圃　根岸短歌会の話　『同人』　(1)
高田浪吉　正岡子規に就いて　『短歌春秋』　(1)
徳野眞壬　鉄幹・子規・槐園　『ポトナム』　(1)
斎藤茂吉　子規の歌一首　『アララギ』　(1)
大熊信行　子規と左千夫　『まるめら』　(1)
斎藤茂吉　子規の歌一首補遺　『アララギ』　(2)
飯田陀物　正岡子規考及現下　『俳句月刊』　(2)
神畑　勇　子規の短歌革新の階級性　『短歌クラブ』　(3)
藤川忠治　文壇に活躍前の正岡子規　『国語と国文学』　(4)
永井一考　明治文学史　再版　文献書院　菊洋　三五三頁　(4)

（註）第三期日清戦役後、第三章「俳句の革新」第四章「和歌の革新」あり。

篠田太郎　史的唯物論より観たる　近代日本文学史　菊洋　(4)

（註）第二篇の(二)「反動的状勢と貴族的封建的文学の改良革新」に、「和歌俳句革新の意義」・「俳句の革新」あり。

神畑勇一　子規短歌革新の進歩性と保守性　『短歌月刊』　(5)
藤村作編　日本文学大辞典　新潮社　(6)

（註）本辞典には、河東碧梧桐執筆の「子規」をはじめ、子規関係文献の解説が可成り久っている。

正宗白鳥　文壇人物評論　中央公論社　四六洋　四七六頁　(7)

（註）「正岡子規論」を収めている。

藤川忠治　作家としての子規の態度　『文学』　(7)
寒川鼠骨　子規居士の俳句研究　改造社　(9)
　　―「俳句講座」第五巻所収―
寒川鼠骨　子規居士追懐　改造社
　　―「俳句講座」第八巻所収―

岡麓　子規の追憶　改造社　(9)
—「短歌講座」第十二巻所收—

香取秀貞　根岸短歌会の思ひ出　改造社　(9)
—「短歌講座」第十二巻所收—

大森・桐明　子規の俳論　附乙子の俳論　改造社　(10)
—「俳句講座」第四巻所收—

荻原井泉水　子規・紅葉・放哉　改造社
—「俳句講座」第二巻所收—

山崎楽堂　写生文の考察　改造社
—「俳句講座」第四巻所收

久松潜一　明治文学序説　山海堂　菊半　(10)
兼村作　(註)本書第二章「正岡子規」あり。

高沢虚子　芭蕉の消息一通と子規の「松蘿玉液」の一項と　『山茶花』　(10)

長野宇平治　正岡氏と夏目氏の思ひ出　『心の花』　(10)

新井聲風　明治以降物故新派俳人伝　あかね社　四六版　六〇頁　(11)

岡麓　子規と節の一面　『日本短歌』　(12)

藤川忠治　子規と旧派宗匠　『国語と国文学』　(12)

小西謙　明治写生文学　木星社
—「明治文学講座」第四巻所收—

昭和八年（一九三三年）

依田秋圃　正岡子規の歌論と作品　『短歌研究』　(1)

岡麓　根岸短歌会の頃　『アララギ』　(1)

松岡貞総　子規と鉄幹　『常春』　(2)

斎藤茂吉　正岡子規の歌二十首　『短歌研究』　(4)

藤川忠治　子規晩年の心境　『短歌月刊』　(4)

結城健三　正岡子規の奥羽行脚　『短歌研究』　(5)

都筑省吾　正岡子規の歌論について　『槻の木』　(8)

小原幹雄　子規和歌新論序説　『帚木』　(8)

松岡満夫　明治の俳句　中興館　(9)

―「日本文学講講」第五巻所収―

（註）本論文中「旧派の諸相と俳句の革新」及び「子規の全貌」あり。

※藤川忠治　正岡子規　山海堂　菊判洋五八〇頁　(9)

―「明治文学研究叢書」の内―

（註）巻末に「附録」として(一)「正岡子規略年譜」(二)「子規研究文献目録」、「索引」として(一)「俳句索引」及び(二)「和歌索引」がある。

高須芳次郎　明治大正昭和文学講話　新潮社　四六洋五三七頁　(9)

（註）本書第八に「俳句革新の運動」・「短歌革新の運動」あり。

河東碧梧桐　河東静渓の日記に現はれたる子規居子　『同人』　(9)

湯本喜作　子規と愚庵　『短歌春秋』　(9)

（註）翌一〇月と二回連載。

古賀藏人編　子規居士研究年誌　『同人』　(9)

（註）昭和六年九月から同七年八月までの研究文献を収む。

荻野冬蕁　子規研究雑纂　『同人』　(9)

三井甲之　正岡子規論　『短歌研究』　(10)

加藤松之助　子規の野球の歌　『みづがき』　(10)

※宮田戊子編　正岡子規研究　樂浪書院　四六判三〇〇頁

篠田太郎　子規論の変遷

夜辺順三　子規と新派和歌

矢代東村　子規の短歌論

坪野哲次　子規の短歌の発展

椎崎法藏　子規と幕末歌学の伝統

伊沢信平　子規とアララギ派

土方定一　子規の文学論

宮田戊子　子規の新派俳句
岩動炎天　子規の月並打破
松崎政男　子規門の諸俳人と日本派俳句
村上霽月　子規居士について思出づること
赤木栢堂　子規夜話
柳原極堂　子規遺稿散策集
河東碧梧桐　子規と讀書
宮田戊子　子規年表
黒沢隆信　子規・節・左千夫の文学　金星堂　四六三七三頁　(11)
小泉苳三　藤川忠治氏正岡子規を評す　『時事新報』　(11)
（註）十一月二六日の紙上。
藤川忠治　正岡子規の歌論の輪郭　『国語と国文学』　(12)
川島益太郎　現代作家の人及作風　大同館　四六洋　四五七頁　(12)
（註）本書第三篇第二章「重なる俳人の人及作風」中に「子規―其他十氏」あ

り
吉田冬葉　子規の俳句と其一生　交蘭社

昭和九年（一九三四年）

石田幸太郎　ホトトギスと写生文　改造社　(1)
―「日本文学講座」第十一巻所收―
小泉苳三　根岸短歌会の位相　『立命館文学』　(1)
（註）三月号と二回で完結している。
渡辺順三　子規と啄木　『短歌春秋』　(1)
竹村英郎　子規と節との関係　『青波』　(2)
木村毅　「蕪村句集講義」にあらはれた正岡子規　『明治文化研究』　(2)
橋詰一郎　子規よりアララギへ　『明治文学研究』　(七)
釈超空　子規の歌論に潜存するもの　『短歌研究』　(4)

上田武夫　正岡子規考　『国文学研究』(5)
河東碧梧桐　蕪村の句より子規の和歌まで　『短歌研究』(5)
加藤松之助　子規雅感　『みづかき』(6)
（註）七月号と二回連載。
結城健三　正岡子規の日本入社前後　『覇王樹』(6)
佐々木信綱　子規と天降言　『日本歌人』(6)
高沢虚子　子規研究　改造社(7)
―「日本文学講座」第八巻所収―
高木蒼梧　明治時代の俳句　改造社(7)
―「日本文学講座」第四巻所収―
原田芳起　評論家としての正岡子規　『日本文学』(7)
小泉苳三　根岸短歌会の史的地位　『明治文学研究』(9)
諸家　正岡子規研究　『俳句研究』(9)
柳原極堂他　子規の思出

河東碧梧桐　子規句集に就て
寒川鼠骨　子規居士の絵
藤野磯子述　始めて上京した当時の子規
中山太郎　子規居子のこと
片岡良一　子規と明治文学史
湊楊一郎　子規の業績
竹下竹人　俳人子規
香取秀眞　子規先生の墓銘　『短歌研究』(9)
荻原井泉水　糸瓜の花　『大阪毎日新聞』(9)
佐々木信綱　明治文学片影　中央公論社　菊洋　三〇八頁(10)
（註）「正岡子規君」を收めている。
篠田太郎　近代日本文学研究　楽浪書店　菊洋　四三五頁(10)
（註）「正岡子規の文学上における地位」を收めている。
高須芳次郎　明治文学史論　日本評論社　菊大洋　五五一頁(10)

（註）本書第三期第九章に「ゆの里人の一派」・「正岡子規の俳句革新運動」・「子規及其の周囲の人々」を收める。

松田常憲　正岡子規
―「明治大正短歌評釈号」所收―　『水甕』　(10)

※小泉苳三　正岡子規　根岸短歌会とその位相　立命館出版部　四六版　五〇頁　(10)

（註）巻末附録として「正岡子規・根岸短歌会研究文献目録」がある。のちに、「歌人子規とその周囲」と書名を改めて再刊された。

伊藤元美　写生文序説　『秀明治文学』　(11)

千葉亀雄　坪内逍遥伝　改造社　四六洋　三〇〇頁　(11)

―「仆人伝叢書」第二十三巻―

（註）本書第四に「正岡子規の俳句論」あり。

山口誓子　写生論の変遷　『俳句研究』　(12)

加藤松之助　子規雅感（五）　『みづがき』　(12)

依田秋圃　正岡子規　改造社　(12)

―「日本文学講座」第七巻所收―

昭和十年（一九三五年）

萩原蘿月　子規以後に於ける季題観念の推移　『俳句研究』　(1)

萩原井泉水　芭蕉・蕪村・子規　千倉書房　(1)

三並良　正岡子規検討　『雲母』　(1)

河東碧梧桐　子規居士と読書　『東京堂月報』　(1)

加藤松之助　子規雅感（六）　『みづがき』　(1)

河東碧梧桐　子規に関し露伴翁に乞ふ　『俳句研究』　(1)

伊澤信平　子規の萬葉集復活と写生の提出　『短歌研究』　(2)

諸家　改訂　正岡子規研究　楽浪書店　(2)

小山鱞美　子規の生活芸術　『青い港』　(3)

（註）四月号に連載。

瀧沢八郎　根岸短歌会と諸雑誌　『ポトナム』(4)
高田浪吉　子規の歌論　『ポトナム』(4)
藤川忠治　子規と女性　『ポトナム』(4)
小山譽美　子規の幼少時代　『青い港』(5)

（註）六月号に連載。

瀬古確　近代日本文章史　育英書院(5)

（註）第一篇第七章「正岡子規の文章」を収む。

宮田戊子　正岡子規の新研究　叢文閣（四六判三八七頁）(6)
宮田戊子　「子規鉄幹不可併称論」の経過と其眞相　『短歌研究』(7)
小泉苳三　明治の和歌革新　『短歌研究』(7)
木下春雄　子規の自然写生　『文学』(8)
島田青峰　子規・紅葉・緑雨　吉海書房（四六洋三〇五頁）(9)
窪川鶴次郎　正岡子規に於ける文学論　『俳句研究』(9)
青木月斗　子規名句評釈　『俳句研究』(9)

―「俳句評釈選集」第四巻所収―

子規庵保存会編　分類俳句全集十二巻　アルス
田林義信　子規遺墨集　附異川鼠骨解説　巧芸社
片桐頭智　正岡子規小論　『国文学攷』(10)
河東碧梧桐　仰樂と鬼庵と子規　『明治文学研究』(10)
山川千冬　墨汁一滴と病牀六尺　『国語と国文学』(10)
　正岡子規鑑賞　『水可美』(10)

（註）昭和十一年三月頃まで連載された模様。

小泉苳三　鉄幹子規不可並称説の意義　『明治文学攷』(10)
宮田戊子編　近代俳句研究　樂浪書院（四六洋三七〇頁）

（註）本書第一部「近代俳句史」の(二)「新派俳句勃興史」中に(B)「日本派」第二部「俳人研究」(二)「新派俳句」中に(A)「日本派」（神畑勇執筆）がみられる。

昭和十一年（一九三六年）

片岡良一	芭蕉と子規	『俳句研究』	(1)
結城健三	子規の師弟愛	『短歌研究』	(1)
香取秀眞	正岡子規を中心に	学芸書院 四六洋 四九四頁	(3)
和田辺水樓	子規の写生論と花鳥詠論	『俳句研究』	(4)
吉田冬葉	正岡子規の俳句	『俳句研究』	(4)
萩原蘿月	近代俳壇論戦史	『俳句研究』	(4)
鹽田良平	明治の俳句革新と時代思潮	『俳句研究』	(4)
小泉苳三	子規写生論の成立	『俳句研究』	(4)
唐木順三	近代文章史と写生文	『俳句研究』	(4)
藤川忠治	俳壇と歌壇との交渉	『俳句研究』	(4)
	―正岡子規を中心として		
岩動炎天	子規を続る人々	『俳句研究』	(4)

野中春水	子規とガラス障子	『帚木』	(4)
米沢武	子規雅考（二）	『水可美』	(4)
保田与八重郎	正岡子規について	『新潮』	(4)
奥村寒亭	子規の少年時代	『俳句研究』	(5)
土方定一	近代日本文学論史	西東書林 四六洋 四二〇頁	(6)

（註）本書は「正岡子規の文学論」がみられるが、これは、昭和八年の宮田戊子編「正岡子規研究」に載せられたもの。たゞし、戦後、昭森社から出版された版（昭和二十三年）では、この論文は削除されている。

亀田小蹄	蕪村と明治俳壇	『俳句研究』	(7)
石川時雨	鴎外と子規	『現実短歌』	(8)
石井庄司	正岡子規未発表子規書簡	『短歌研究』	(9)
結城健三	正岡子規の歌再吟味	『短歌研究』	(9)
原石鼎	子規の名句鑑賞	『短歌研究』	(10)
		『俳句研究』	(10)

手塚正夫　子規と「岩手の考子」　『現実短歌』　(10)
安斎桜磈子　日本派語家の名句鑑賞　『俳句研究』　(10)
島田青峰　日本文学評論史　至文堂　菊洋　五〇頁　(10)
久松潜一　―近世最近世篇―

（註）「歌論に於ける写生」及び「俳論に於ける写生」がみられる。

高浜虚子　明治三十二・三年頃の根岸の或る夜　『ホトトギス』　(11)
―小説「柿二つ」件々―

土井重義　陽外宛子規書簡について　至文堂　(11)

（註）藤村博士功績記念会編「近世文学の研究」に収められた論文。

近藤春雄　子規の短歌革新運動　『学苑』　(12)
結城健三　子規のみちのくの紀行　『俳句研究』　(12)
河東碧梧桐編　子規言行録　政教社　(12)

昭和十二年（一九三七年）

山口茂吉　正岡子規の「冷笑の歌」三首　『アララギ』　(1)
山岸己之助　子規管見　『七葉樹』　(2)
―丘千夫・師への肉肝―
斎藤茂吉　子規の歌一首　『アララギ』　(3)
―童馬山房夜話―
内田耕人他　われわれの子規　『愛吟』　(3)
太田鴻村　明治以後写生の変遷　『石楠』　(3)
杉敏太郎　子規と元義　『短歌研究』　(5)
佐藤春夫編　近世文芸名家伝記資料　文芸懇話会　補　三頁　(5)

（註）「正岡子規」を収めている。

神田哲雄　與謝野寛と正岡子規その他　『現実短歌』　(6)
上野夕穂　正岡子規と長塚節　『あさいつ』　(7)
藤川忠治　子規と漱石　『国語と国文学』　(8)

片岡良一　子規の小説　『短歌研究』(9)
岡麓　子規の小説　『短歌研究』(9)

昭和十三年（一九三八年）

高浜虚子　ホトトギス五十年史を編むについて（対談）『ホトトギス』(1)
柴田宵曲　（註）十三年四月号まで連載。
高浜虚子　子規の前に独り言　『ホトトギス』(4)
秋山彰之助　新しく子規を観る　『層雲』(4)
塩田良平　子規と散文精神　『短歌研究』(4)
中野琴石　子規居士十六歳の書簡　『憑霄』(5)
中島正夫　正岡子規の俳論　『国語国文』(6)
中村清一郎　子規に於ける蕪村　『解釈と鑑賞』(7)
小宮豊隆　夏目漱石　岩波書店（四六洋八八六頁）(7)

（註）「正岡子規」の項あり。
明治文学研究会編　正岡子規　大都書房（四六洋三二六頁）(10)
―明治文豪アフォリズム叢書―
（註）本書は一種のダイジェスト。巻末に「正岡子規小伝」と「正岡子規著作年表」が添えてある。
井上三喜夫　深秋雑記　『層雲』(11)
松田常憲　柿と子規　『水甕』(11)
中村不折　子規と漱石　『国漢』(11)
頑古道人　子規の天保時代月並論に就て（二）　『筑波』(12)
塩田良平　概観明治文学　（京都）人文書院（四六洋三九八頁）(12)
（註）「子規と短歌革新」・「子規と俳句革新」を収めている。

昭和十四年（一九三九年）

結城健三　久内当時の子規の歌　『短歌研究』(1)

高田浪吉　正岡子規の名歌　『むらさき』(6)

唐木順三　近代日本文学の展望　黄河書院　四六洋　三五四頁　(6)

（註）「近代文章史と写生文」を含んでいる。

岡麓　斎藤茂吉　等　正岡子規短歌合評　『アララギ』(8)

（註）この合評会は、昭和一八年一月頃まで約四〇回にわたって継続されている。その間、顔ぶれには多くの変動があったが、斎藤茂吉を中心として、岡麓、土屋文明、初本城西、上代偕三、小暮政次、岡田貞、堀内通孝、泉幸吉、田中四郎、加藤七三、岩沙政一、小松三郎、菊地周作、五味保義、柴生田稔、森山汀川、上村孫作、伊達宗雄、鹿児島寿蔵、竹内大郎、唐野三郎、松井芒人、砂浦明平、等々の諸氏が交る交る参加している。

太田鴉村　明治俳句史論　文蘭社　四六紙　三五頁　(8)

（註）第一編「明治俳句の発生時代」。第二編「明治俳句の成長時代」を収めている。

三好達治　偶感　『短歌研究』(9)

—子規—

石山徹郎　現代短歌　日本評論社　四六洋　三七〇頁　(9)

—「日本古典読本」第十三巻—

（註）展望篇に「短歌革新期」に関する論説あり。

宇野浩二　病者の短歌　『短歌研究』(10)

—子規—

（註）翌一五年二月号と二回連載。

北住敏夫　子規の歌論における写生の特質　『文学』(10)

飯田正一　子規の歌風　『解釈と鑑賞』(11)

中川与一　子規に於ける古今集　『文芸文化』(11)

昭和十五年（一九四〇年）

北住敏夫　子規の文学論　『文芸文化』(1)

大橋松平　正岡子規　―現代秀歌鑑賞―　『むらさき』(1)

岡山巌　正岡子規

伊藤源之助　子規の歌　―短歌漫言十五―　『短歌復興』(2)　『現実短歌』(2)

藤川忠治　解釈と鑑賞「子規歌集」　―短歌初学講座―　『日本短歌』(2)

木内進　子規の写生主義

上田英夫　正岡子規　―近代短歌の研究―　『文芸文化』(4)　『国語教育』(9)

（註）一〇月まで連載。

昭和十六年（一九四一年）

伊藤信吉　写生文の作家達　『俳句研究』(3)

富安風生　子規　『解釈と鑑賞』(3)

宮本三郎　芭蕉批評史に於ける子規の地位　『国語国文学研究』(4)

北住敏夫　正岡子規論　―子規に於ける萬葉風―　『日本短歌』(4)

宝川鶴次郎　正岡子規　『俳句研究』(7)

正宗白鳥　作家論　第一巻　創元社　四六洋　三五〇頁　(8)

（註）明治文壇総評中に「正岡子規」につき論述してある。

西村孝次　日本の歌　―子規の歌論―　『短歌研究』(10)

西村孝次　柔軟なこゝろ　―子規の手紙―　『俳句研究』(10)

宇田雪雨　子規の指導理論を批判しつゝ　『草莖』　(10)
松田常憲　新萬葉集の鑑賞　『短歌研究』　(11)
—正岡子規について—

昭和十七年（一九四二年）

白木裕　子規の「秋風」の歌について　『あらたま』　(3)
窪川鶴次郎　子規のこと　『短歌研究』　(4)
中野菊夫　明治三十年頃の愚庵・子規・湖邨　『七葉樹』　(10)
片桐頴智　子規の歌　『解釈と鑑賞』　(11)
—連歌を中心として—
島田青峰　子規の俳句鑑賞　『解釈と鑑賞』　(11)
高田浪吉　子規とその弟子　『解釈と鑑賞』　(11)
佐久木信綱　子規君の書簡遺墨など　『解釈と鑑賞』　(11)

藤川忠治　子規の文学論　『解釈と鑑賞』　(11)
近藤忠義　正岡子規の文学革新とその意義　『解釈と鑑賞』　(11)
須藤克三　子規の歌論考　『解釈と鑑賞』　(11)
西村孝次　生命の相　『俳句研究』　(11)
—「仰臥漫録」について—
結城健三　子規の文学精神　葦牙書房　羊B6　(11)

昭和十八年（一九四三年）

北住敏夫　正岡子規論（下）　『文学』　(9)
—第一部　写生説—
峰岸壮岳、他　子規　『寒雷』　(10)
—現代俳句研究—

（註）十一月号に継続連載。

※高浜虚子　正岡子規　甲鳥選林　A5　五六三頁　(10)

（註）柿二つ、根岸草庵記事、鎹提げて、病床の子規居士、写生といふこと、子規のこと、子規居士の古い時代の句を読む、明治の俳句、芭蕉の消息一通と子規の「松蘿玉液」の一項と、子規研究、明治三十二・三年頃の根岸の或る夜、等々の過去の雑誌論文を再編合冊したもの。

昭和十九年（一九四四年）

山本英吉　子規の文学理念　『短歌研究』　(5)

小泉苳三　正岡子規　『日本短歌』　(9)

稲垣達郎　子規と虚子　『国文学研究』　(9)

昭和二十年（一九四五年）

井手逸郎　正岡子規　弘学社　B6　二〇〇頁　(10)

（註）本書には一八年五月の自序がある。昭和二三年六月再版、二六年五月には標題を「子規」と改め、萩原井泉水の「子規を想ふ」という追悼記を添えて出版。

昭和二十一年（一九四六年）

萩原蘿月　子規に就いて　『国語と国文学』　(10)

※斎藤茂吉　正岡子規　創元社　B6　二五七頁　(10)

—創元選書—

（註）昭和一八年六月の後記あり。既発表の論文を一書にまとめたものである。

昭和二十二年（一九四七年）

平野仁啓　子規の方法　『短歌研究』　(1)

（註）二月まで連載。

R.H. Blyth　BASHÔ, BUSON, ISSA, SHIKI　『俳句研究』　(6)

寺田透　正岡子規　『八雲』　(11)

澤山書房編　子規歌集　澤山書房　小判　一四四頁

昭和二十三年（一九四八年）

渡辺順三　子規短歌選集　新光出版社　B6　一四三頁　(3)

—附、天代東村解説—

富安風生編　正岡子規集　知道書房　B6　三〇頁　(4)

小泉苳三　正岡子規　（札幌）玄文社　B6　一六六頁　(4)

王城徹　正岡子規ノート　『短歌研究』　(6)

（註）七・八月に連続。

山口誓子　子規と「一年有半」　『望郷』　(6)

五味保義　正岡子規の発展性　『望郷』　(6)

（註）一〇月号と二回にわたっている。

第一書店編　歌よみに与ふる書　（書橋）第一書店　A6　三八頁　(6)

高沢庵子　柿二つ　文芸春秋新社　B6　三二頁　(6)

岡崎義恵　日本芸術思潮　第二巻の下　岩波書店　A5　三〇二頁　(6)

（註）本書に「子規をめぐる風流」を収めている。

寒川鼠骨編　正岡子規選集　全六巻　改造社　B6　各三〇〇頁

中村草田男編　子規俳論集　創元社　B6　三六頁　(7)

—創元選書—

柳田国男　子規一門の連句　『俳句研究』　(7)

（註）八月まで継続連載。

秋元不死男他　子規俳句研究　『天狼』　(8)

（註）昭和二四年一月頃まで連続掲載。

佐々木信綱　正岡子規の近世萬葉研究書目　『国語と国文学』(9)
高田浪吉　正岡子規研究　『火乃木』(9)
宮崎利秀　子規と芭蕉　『あざみ』(9)
古島一雄　晩年の子規　『新星』(9)
　―日本新聞時代を憶う、四―
杉浦明平　正岡子規　『短歌主潮』(9)
寒川鼠骨解題　未発表小説「山吹の一枝」　『丹頂』(10)
　―正岡子規・新海非風連作―
柴田宵曲　子規居士の俳句　『丹頂』(10)
武者小路実篤　子規の表現慾　『丹頂』10
室積徂春　処女作の味　『丹頂』(10)
沖田泉　子規と湖村と　『丹頂』(10)
石川福之助　俳句との関連について　『火乃木』(10)
　―正岡子規研究―

五味保義　啓蒙の意味(二)　『短歌研究』(10)
高浜虚子選　子規句集　四刷　岩波書店(11)
　―岩波文庫の内―
高橋文雄　正岡子規の恋　『伝記』(11)
伊藤信吉　近代文学論　和田堀書店　B6　三六頁(11)
　(註)本書に既発表の「写生文の作家」を収めている。
新間進一　明治大正短歌史　東京堂　B6　三八〇頁(11)
　(註)本書第二章「明治短歌史後期」第六節「根岸派の進展」の項に(一)「正岡子規」がある。論文の末尾に、参考論文を挙げている。
山口戒吉選　正岡子規集　往来社　B6　二六五頁(12)
武蔵野文庫刊　正岡子規歌集　武蔵野文庫　B6　一六二頁(12)

昭和二十四年(一九四九年)

佐々木陽一郎　子規と「写生」　『短歌俳句研究』　(1)

矢代東村　子規短歌の反動性　『短歌俳句研究』　(1)

栗林農夫　子規に於ける二つの面　『短歌俳句研究』　(1)

藤川忠治　子規文学の基盤　『解釈と鑑賞』　(1)

中村草田男編　俳句の出発　創元社　B6　三四頁　(2)

—創元選書—

（註）巻末に、子規年譜、解説あり。

奥川鼠骨　子規庵の今昔　『藍』　(2)

石井庄司　歌人の傳統意識　『日本短歌』　(3)

—子規から茂吉へ—

藤川忠治編　短歌の革新　創元社　B6　三三頁　(6)

—創元選書—

（註）巻末に藤川氏の解説及びあとがきを載せている。

中野菊夫　愚庵と子規・湖村とについて　『短歌俳句研究』　(6)

寺田透　作家私論　改造社　B6　三〇四頁　(6)

（註）「正岡子規」論あり。

藤森朋夫　子規と蘆　『余情』　(6)

片桐顕智　正岡子規　『解釈と鑑賞』　(6)

—近代名歌鑑賞—

（註）七月号まで二回連載。

岩田潔　子規秀句鑑賞　『俳句の門』　(7)

—研究と鑑賞—

岡麓　思出の記　『アララギ』　(7)

（註）八号号まで二回連載。

片岡良一　近代日本の作家と作品　岩波書店　A5　六三三頁　(9)

（註）「子規の小説」（昭和一二年九月号『短歌研究』所収）を収めている。本書は、第四刷であるが、初刷昭和一四年一一月である。

久保田　正文　　暸らかな誤り
　　―正岡子規の評価について　　『近代文学』　(10)

寒川鼠骨編　　子規居士絵画観　　日新房　B5和装　七二頁　(11)

寒川鼠骨編　　菓物帖・草花帖　複製　　日新房　13×35cm　(11)

寒川鼠骨　　子規庵のこと　　『明治文学研究』　(12)

昭和二十五年（一九五〇年）

今井千鶴子　　子規について　　『ホトトギス』　(1)

黒岩一郎　　新歌論誕生における子規歌論の位置に就いて　　『国語と国文学』　(1)

香川進　　正岡子規　　『短歌雑誌』　(2)
　　―その人間性への序説―

松本幸　　正岡子規　　『学苑』　(2)

雉川滉　　鴎外・漱石・子規・藤村　　『解釈と鑑賞』　(2)

阿部喜三男　　子規の書簡　　『俳句研究』　(3)

山本和夫　　正岡子規研究ノート　　『魔法』　(3)

高井秀樹　　鶏頭の句の背景　　『現代俳句』　(4)

藤川忠治　　写生文運動と現代文　　『解釈と鑑賞』　(4)
　　―正岡子規を中心として―

北住敏夫　　写生主義の行方　　『短歌研究』　(4)

佐藤佐太郎　　正岡子規の歌　　『日本短歌』　(5)
　　―名歌鑑賞講座―

小寺正三　　芭蕉・蕪村への考察　　『現代俳句』　(7)

平野仁哲　　子規の独創性　　『馬酔木』　(9)

吉野秀雄　　子規の晩年の句について　　『馬酔木』　(9)

タイジェスト・シリーズ刊行会編　　病牀六尺　　ジープ社　B6　一七三頁　(10)
　　―タイジェスト・シリーズ、五三―

苔尾　嶺水　子規子の死　『俳句研究』(10)

鹿児島　寿蔵　正岡子規　雄鶏社(12)

—短歌文学讀本の内—

昭和二十六年（一九五一年）

上平平谷　正岡子規　『日本歴史』(2)

井本農一　子規　『解釈と鑑賞』(3)

邦枝克二　小説子規　六興社　三〇頁(5)

高浜虚子　はなやかなりし頃の子規　『ホトトギス』(5)

薄井忠男　子規短歌に於ける俳句的発想について　『国語国文の研究』(6)

高浜虚子　九月十四日の朝　『ホトトギス』(7)

野田宇太郎　新東京文学散歩　日本読書新聞社　A5　三六一頁(7)

（註）本書、その(六)に「子規の墓」「子規庵附近」を収めている。かつて日本読書新聞に掲載されたもの。

久保田　正文　正岡子規(一)　『伝記』(8)

大熊　信行　子規と左千夫　『新日本俳句』(8)

正岡子規研究文献目録稿
考査事務参考資料第一九号
昭和二十六年九月十四日印刷
昭和二十六年九月十九日発行
東京都港区赤坂一ノ一
編集発行　国立国会図書館一般考査部
責任者　齋藤毅
東京都新宿区左門町二一ノ四
印刷　やまと印刷社

1114